

最後まで・・・！

やり投げの黒須は腰に爆弾をかかえたまま、「通過」することを最大目標に投げた。全助走で続投するには、きわめて危うい腰。幸い2位につけ、通過できた。



110mHの中塚は安定していた。東部は向かい風4mの中、15秒99で走っているの
で、15秒フラットくらいの力はあると感じた。
今回、その実力通り15秒07の自己新、春高歴代2位のタイムで3位に入った。

主将・前田は三段跳びで再び意地を見せた。トップの深谷商・嘉山選手は、やはり抜け出
ていたが、その他は混戦だ。前田は東部のチャンピオンだし、追い風参考とはいえ14m
を越えた、という気合が勝った試合であった。1回目に13m87をマークして2位を確
保。3位以下を寄せ付けなかった。後半には13m62を向かい風1.2の中でマークし
た。公認の自己新記録だろうか。

県大会を終えて、何を思うか？

県大会後、戦い終わった3年生は、胸中様々であろう。

しばらく気が抜けた状態になるものだ。

現役選手を見ていると、当時の自分を思い出してしまう。

こんな私でも、県大会前のランキングで6番目だった。

小原先生にも「のもと、一発ひっかかればいけるぞ!」といわれ、舞い上がり、頭の中はもう関東だった。・・・しかし実際にはそんなに甘い現実はあろうはずもなく、敗退した。たしか、県大会の6位が6m85だったように覚えている。・・・届かなかった・・・

現実を目の当たりにして、しばらくはぼうっとしていた。県新人で活躍した仲間も、ケガに泣いた。県大会の翌日、教官室の前で小原先生と出くわした。

私は県の成績が良くなかったので、申し訳なく思わず下を向いてしまった。

すると小原先生が、「なんだよ、それくらいで、がっかりするなよ!」と、明るく笑ってくださったのだ。

肩の力が、スーっと抜けた感じだった。

私はやっと県大会レベルだが、実際に瀬上(右)やリレーで全国総合も上位を十分狙えるチームだった。当時は1位6点制。実際の秋田インターハイで、総合優勝は奈良・添上の18点。春高は11点で総合5位だから、ランキングのように100mとリレーが入っていたらもう6点、7点とれたかも・・・という思いはいまだに消えない。

そもそも高校2年の春、

「のもとー、関東来てくれない?」

「おお、いいよお」

この一言でその後、私と瀬上のコンビが生まれた。監督からすると、奇妙な取り合わせだ。「真面目な瀬上と、なんで野本なんだ?」と思ったことだろう。



しかしそこは春高。瀬上が付き添いを決めたら、それが通ってしまうのだ。

宇都宮関東、名古屋インターハイ、秋田インターハイと遠征した。心の中ではチームで戦っているつもりだった。だから胸を張って開会式にも並んだ。(小原先生が並ばせて下さった。)

インターハイ後の春高帰還をもって、私の夏、春高での青春は終わったと思った。



やり尽したという実感もあった。

さて3年生のみんなは、どういう今後を考えているだろう。

夢を抱いて死にもの狂いでやってきたのだ。

今はそれぞれが思うように余韻にひたればいい。

引退試合を県で終えるのか、別に求めるのか。

そして受験はあるが、また大学で好きなレベルでやったらいい。

趣味の域でもいいし、インカレでもいい。

今も昔も埼玉は「狭き門」

世は若年層の人口減少で競争率は減っている。それに伴って学力もスポーツ力も、そして精神面も衰退していると世間では言われている。

しかし県大会を見るたびに「埼玉は変わらない・・・6位(3位)入賞、関東への道は限りなく険しい」・・・と痛感する。

インターハイが始まって60年、埼玉は静岡などと競いながら「陸上王国」として君臨してきた。埼玉の指導者は、かつて自らがインターハイを目指して競った経験をもつだろう。そして指導する立場となって昼夜を問わずに選手育成する。それに応えて真面目に競技に励む学生、そういった風土が織り成す環境は、代々引き継がれる。そうやすやすと崩れるものではない。

そう、県大会はただのインターハイの初戦ではない。
指導者と選手にとって「特別な試合」なのである。

今年も熊谷競技場へ赴き、それを再確認した。

「ロード・トゥ・インターハイ」

県大会の厳しさ、負けた悔しさも辛さも重々理解している。
なぜなら我々OB自身、激しい競争を経験しているのだから。



37回 のもと歯科

(写真右 友人・瀬上の記録は、24年たった今でも破られない東部、県の大会記録)